

《シリーズ対談：教養教育とその周辺》

教養での学びとそのデザイン —常識と創造性のはざままで—

佐々木康成[†], 小西 賢吾[‡]

1. はじめに

初めて担当する科目というのは、どの教員にとってもかなりの不安と少しの期待が入り交じり、それゆえ、授業の方針や設計には多くの時間を費やすことになる。筆者二人もご多分に漏れず、2016年度から始まった「心理学」(佐々木担当)および「社会調査論」「ワールドピックス」(小西担当)のシラバスの作成に際し、分野こそ違え、教養教育におかれた教員どうし、シラバス作成などに関して何度か互いに相談し合ってきた。また、特定の科目だけでなく、日頃から意識したりあるいは逆に無意識的に感じたりしている教養教育に対する考えや活動、さらにはありかたなどについて語り合うことも多かった。そうした中に、授業の材料収集、設計、学びの捉え方、言葉と意識、学びと社会、といったことについて議論した機会があったので、その一部を実際の対談の形式で書き起こし、本稿で紹介していくことにした。教養教育について大上段から語るのではなく、日頃教員として現場で感じていることから出発して考えること、またそれが結果的には人間をめぐる多様な思考の源泉になっていることについて、いささかくだけた形ではあるが読者に伝えられれば幸いである。

本対談は、2016年2月に実際に筆者らが行った4時間余りに及ぶ対談の後半の一部を書き起こしたものである。前出の科目のシラバス作

成および授業の方針に関して一通り議論し、小西担当の「社会調査論」についておおよその授業方針を固めた後、佐々木担当の「心理学」の授業方針について検討している場面から始める。

2. 授業の設計

佐々木(S) たしかに、一般的な心理学入門や心理学概論と名前のつく科目における典型的なシラバスとは違って、ボクの思うところでやっていくっていうのでいいんだけど、何を彼らに学んでほしいか、という大きなポリシーがまだ決まってなくてね。「情報学」⁽¹⁾の場合、情報って何か、情報の流れて何か、ということについて、解釈しながら、設計しながら学んでくれればいいし、専門用語も10個程度覚えてくれればいいんだけど、「心理学」も同じように考えていきたいなと思ってます。でも、学内の先生方と話していると、評価の際に試験をする必要があるかどうかという点で、言葉を覚えてもらいたいという意味では試験をした方がいいと言う先生もいるし、学んできたことなり教えたことなりのほんやりとしている部分について試験時間だけでもいいからじっくり振り返ったり考えたりする時間にしてほしいとおっしゃる先生もおられます。でもね、それってすべて授業中にできると思うんですよね。厳密な試験

[†] yasaki@seiryu-u.ac.jp (Kanazawa Seiryu University, Liberal Arts and Sciences)

[‡] konishik@seiryu-u.ac.jp (Kanazawa Seiryu University, Liberal Arts and Sciences)

をやる時間として取らなければならないのかどうかという点でやっぱりかなり考える余地があるように思うんです。

小西(K) 実は、僕はどんなに人数が多くても試験はしたことがないんですよね。いつもレポート課題にしています。

S そーだよー。ほんとはそれで行きたいっ。まあ、もちろん、そのなかでのいろいろな兼ね合いは必要とは思いますがね。

K 課題の内容として、3つほど選択肢を与えます。そのうち1つは、「授業に関連して自分が関心を持ったテーマについて自由に書いて下さい」としています。こうすると、時々爆発的に面白いのを書く学生が出てくる。「男性はむだ毛をどれだけ気にするか」というのが文化人類学のレポートではいままで一番インパクトありましたね！（笑）

S そっち方面⁽²⁾に適した学生よね。

K どうしても、「異文化体験をしました！」という絵日記的なもの⁽³⁾が出てくることがあります。事前に単なる絵日記はダメだよと言っても、2割程度は出てきますね。でもね、試験を作るってこと自体ができないような内容を教えてきてしまっているというのがありますね。

S そうそう、そうなんですよ。もちろん、言葉の暗記を中心にした授業をやって、そのための試験をやることはできるんですが、教養教育に関わる科目においてそういう授業がいいかどうかということもありますよね。—中略—

K 頑固さ⁽⁴⁾について話すのってどうですか、この前話しておられた。

S 心理学だとね、固執性、常同性、あるいは創造的思考における機能的固着、みたいな話くらいしかないのでね。イベントベースや現象ベースで話せるような事例が15回分たっぷりあればいいんだけどなと思ってます。なんせ「講義」をしたくない⁽⁵⁾、というのが信

条でね（笑）。

K そうなんですよ。... ちょっとその心理学の教科書を見せていただけますか？⁽⁶⁾

S 一番内容的に詰まってる感じの教科書としてはこれやね。—中略—。ただ、固めちゃう感じでやると、飽き性の自分としてはね、こまめさもないので、どうしていいのかな、と。それに、心理学科の学生に対する「心理学入門」とか「心理学概論」というようなのは本来役割が違いますからね。教養科目における「心理学」としては、その点で悩みどころです。

K 僕の場合は、個々の用語にこだわるよりも出来事、事象をベースに授業をやっていくことが多いです。学生が眠くならないようにということを考えるのも大切なんです（笑）、話し方によってはどうしても集中力が持続できなくなってきますからね。つかみとして写真や映像などのネタをまずは持って来て、折を見てじっくり考える話に移っていくのが理想です。

S 結局そう、そのネタ帳なんよね。「情報学」でもそうですが、何も無しでおしゃべりすると非常に説明的になってしまうので、ちょっと何か用語やトピックに関連のある「ネタ帳」としてのメモ程度のことを書いておく必要はありますね。そうすると、それをトリガーにしてどのように話を進めていけるかですよ。一方で、事細かく講義ノートを作成するというのも、同じく説明的になってしまう、考えさせることへの臨場感がなくなってしまう感じになりますし...

K そうなんですよ。細かな説明に終始するだけでは、教科書を読めばわかることを繰り返しているのとあまり変わらないし、せっかくの教室という場がもったいない気がします。なにより教員自身が話していてこちよくない（笑）。教壇で話していると、「あ、今この話をあまり理解しないまま話してしまっ

た!」⁽⁷⁾とか, 学生は明らかについてきていない, とかがはっきりわかるものです。往々にして, 学生が興味深いと感じてくれたときは, 自分も話したり対話したりする喜びを感じていることが多いんですね。言いたいことが内面からあふれだす感覚というか。

S そうですそうですね。また一方では, あまりにこちらがスラスラと話していくことにもデメリットはあると感じて, 例えば, とてもうまく進められたと思った回の講義に限ってあまり理解してもらえていなかった, というようなことはわりとあつたりします。

3. 学生からの学び

K 先生, 授業のネタ帳ってどうされてます?

S それはね, なにより学生とのおしゃべり, がネタ帳。どれくらいじっくり学生と話ができるか, そして, その中からどのような問題やテーマを見つけられるか, ですね。この前お話しした「意味付け」の話⁽⁸⁾もそうなんです, ミニッツシート⁽⁹⁾に書かれていたことから学生がどんなことに気づいているかということに注意を向けるというスタンスですかね。前の大学でのことも思い出したりとかもね。

あとおもしろいのはさ, すんごくよくしゃべりに来る学生, よくしゃべる学生のほうが, 自分のノートとか, レポートとかを見せたがらないことが多い。そこはあかんのかという感じになってしまいます(笑)。成績も友達とのこともあるいはもっとプライベートなこともしゃべるのに, 著作物は見せてくれないのか。著作権ってこういうことかな, と思ったりもしますが。今読んでる本も明かしてくれない。自分の思考や思想に関すること, だからかなあ。

K 自分の部屋の本棚をむやみに見られたいのと同じでは?何を読んでるか書いてるか

がすべてわかると, 教員と学生, 言い換えれば, 評価者/被評価者という関係性がもちこまれてしまうと思います。

S なるほどお!それはあるかもしれないですね。何人かが言ってただけで, 全部しゃべると先生全部わかってしまうでしょ, 日頃でさえ心理学やってるんだから, ってね。そんなんわからんよ, とは言ってるんですけどね。なるほどお, 腑に落ちたなあ, 評価するものさされるもの, つかあ。そうはなりたくない, ということやね。

K こんなことしか考えてないのか, しょうもないなって思われたくない, というような。学生するとき, 先生としゃべるときは, どこか品定めされたくないという気持ちが僕にはありました。ただ, いざ教員になってみると現金なもので, 学生とできるだけ「一緒に考える」フラットな関係を構築したい気持ちになります。ただ授業の場は単位認定システムの中で成立している以上, どこか学生との間に越えられない一線を感じてなんとも寂しいというか複雑な気持ちになることもあります。

S 評価者/被評価者関係か。なるほどなあ, そういうことかあ...。そういうえば, ある先生がおもしろいことをおっしゃっていました。ご自分の担当科目の授業を受講している学生が, 研究室にふらっと来てくれたときに話が進んで, おもしろい図書があるからって渡したら, ほどなくして返しに来たので, その感想を聞いてみたら, その後ぷつぷつと研究室には来なくなった, というようなね。たぶん, 同じですね, 評価者/被評価者関係を学生側が意識してしまったということかなあ。教員側はたとえそんな風に意識してなかったとしても, 学生側はやはり意識してしまうということかなって...。

K そういえば, 基礎ゼミ⁽¹⁰⁾の最後にプレゼン大会をやって, 質疑もしてもらったのですが, みんながいる教室だとスムーズに進んだ

のに、研究室で少人数でやると逆に会話が滞ってしまったことがありました。授業での発言モードと普段の会話モードがうまく切り替わらなかったのかなとも思いましたが、研究室のような、教員との距離が物理的にも心理的にも近い場でどう振る舞うかというまどいもあったかもしれない。

S 関係性がそれほど密でない学生だと、何でも話し始める。一つ話し始めて、一つ受容すると、堰を切ったように話し始める。1時間ほど（驚）。でもそれも最初の感じとしゃべっちゃってからの、ある種のカタルシスというか、ちょっとおもしろいバタン。つまり、その学生は疎な関係から始まっていて、ボクらもそうかもしれないけれど、ある部分を開示したときの怖さというものは、受け入れられることによって一気にでてしまうことになる。にしてもね、久しぶりにアニメの細かな話を聞いたわ。さらに家族の話や友達の話やいろいろもね。

K 僕も中高と男子校のヲタクっぽい世界にいたので、内面のヘンなところや、趣味を思う存分開陳するというところにすごいカタルシスがあるというのは理解できる。近しい人には逆にいえないような何かをずっとかかえてて、どこかでスイッチを押すとこわれた水道のようにどんどん出続けることってありますね。

S 学内のある先生の科目で、自己分析のようなことをさせたときに、あまり書けない学生たち、あまり分析が進まない学生たちに対して、研究室に呼んで指導をしたところ、泣き出してくるくらい自分のことをどんどんしゃべり始めるということがあったそうです。授業などで形式的なものとして出さなければならぬようなものに見えても、実はそれは、そこでは、それしか書けない、書こうとすると感情などがあふれてきてしまうから、書けない、というところが多々あるのではな

いか、ということかもしれない、ということなのかな、と。で、そういう学生たちが何人もいるということでしたので、非常に印象的だった。

K 今年度の「宗教学」の授業のとき、ちょうど先生がまだ授業に来られていなかったときくらいの回で⁽¹¹⁾、宗教とアイデンティティというテーマを扱っていたときに、課題として『『あなたは誰ですか?』自分の名前と所属大学の名前を使わずに説明しなさい』というのを課したんですよ。これでね、堰を切ったように書き出した学生がたくさんいたんです。

S ほおー。

K で、それは一体何だったんだろうと。もちろん、ちょっとしか書かない学生もいるんですけど、自分の基礎ゼミの学生もいたので、あとから「そういえばこういう趣味とかだったよねえ」、とか言ったら、「なんで先生知ってるんですか」、ってなって。

S ははー、なるほど、書いてるときって意識してないんですね。もしかするとある種の憑依と呼んでもいいのかもしれませんがね（笑）。

K そういう意味でこの課題は「宗教学」にぴったりだったのかもしれませんが（笑）。

4. 言葉と意識化

S そうそう、あの、ラベリングの問題⁽¹²⁾ってね、アイデンティティに関することだけではなくて、心理学的には、感覚や知覚なんかでもそうで、例えば、匂いなんか特にそうで、名前を付けた瞬間にクサクする、名前を付けて初めて匂いになる、ということがあれるけれど、名前を付けないということがいかにその無意識的なところで様々な活性化を催すのか、ということの意味するんだなというふうにも思いました。

K 哲学や仏教の観点からみても、この議論は

おもしろいところがありますね。ことばで世界を切り取るんですよね。ことばで名前を付ける, そうすると一見わかりやすくなるんだけど、その背後にある様々な豊かさは消えてしまう。

S うーん, 悩ましいのは, 例えば, 課題を出すときに, ホントはここまで言ってあげたいんやけれども, 言った瞬間に他に考えてほしいことのすべてが消えてしまうというような場合があるから, それが課題を出す側としては惜しいので, あるいは学生たちにとっても惜しいことになるので, 言えない。

K どの分野にでも言えることなのかもしれませんが, 1年生のときはとてつもない考える才能に恵まれているようにみえた学生が, 学年が上がるにつれて専門用語だけを並べ立てる小賢しいヤツになっていってしまうというようなこともありますね。自戒を込めて, 研究者も往々にしてそうなんです。

S そうですね, ボクはそれについて, 「区切る」ということばをよく使うんです。例えば, 基礎ゼミ⁽¹³⁾では, 人とモノとの関係をテーマにしていたんですが, その中で空間というものをどうやって表すか, というようなときに, ある部分からある部分までは誰かの空間, そこから先は別の人の空間, というような認識をすることがあるとおもうけれど, それは, 何も敷居や目印がなくても自分で勝手に区切りますよね。空間というのは何かの拍子に区切った瞬間にある意味がソコに見いだされる, あるいは意味があるからこそそのように区切られる, と感じる, みたいなことがある。つまり, 区切りというか先ほどの小西先生の言葉で言うと「切り取る」ということが, ゼミ生の中でもわかってきたみたいで, それをすることによって明確になるものがある。例えば, 学生が質問をする場面があって, ゼミ生にいつも「質問することやその意味は大事なんだよ」と言ってるんだけど

なかなか理解してもらえていないことが多いけれど, なかには気づき始めている学生がいて, 質問をすると, 自分の考えていることがクリアになる, そしてそこからより連想されるものが次々に出てくる, モヤモヤしているとそのままの状態でとどまってしまうけれど, 口でしゃべって質問をすると, その言葉から, その文から, あるいはその文脈からあふれ出てくる連想のようなものが, もう一度また自己回帰的にふくらんでいく, そのことが重要だ, と気づいた学生が何人か出てきた。ああ, そういう学生が一人でも二人でもゼミの中から出てきてくれたことはほんとはよかったですと思えた瞬間でした。で, そういうラベルするとか区切るということが, 学生たちには, ホントは, そういうことも大事だよ, そうじゃないことも大事だよ, ということをどうやって伝えたらよいか。

K ことばの使い方を知ること, 何の名づけもされていない混沌とした現実から一回引き上げることができる, ただし引き上げすぎるとある面しか見えなくなってしまう。

S かといって, 引き上げないと見えない, ということもあって, 一度は引き上げてみるために発言をする, 書いてみる, 気づく, 考えてみる, ということは必要ということですよ。ボクがよく使っていたことばとしては, 「設定しろ」ということです。例えば, 課題が与えられて何を書いていいかわからないという学生に対して, 「自分でなにかココからココまでのことだと思ってやればいいじゃない!?', って言うんですよ。社会の中でも, その「設定する」ということは何度も出てくるものだから, 「設定する訓練だからね, 学生のうちは」, って言うことにしてるんですよ。

K 自分のなかで妥当な「設定」のラインというものをうまくつかめるようになっていってほしいですよ。たとえば「社会調査論」で

も話す予定なんですけど、「社会」や「文化」ってとても便利なことばなんですよ。「社会に出る」とか、「社会は厳しい」とか、「それは文化の違いだ」とか簡単に言えますけど、その場合の「社会」「文化」って一体何だろう。つつい分かった気になるけど、ともすれば現場で起こっていることからすごく遠いものになってしまう。その意味で、ちょうどよいことばを探らなければならないと思っています。思考の射程を「設定」しながら、現実をうまく「切り取る」ことばを見つける。それはどうやったら訓練できるでしょうか。場数を踏むとかセンスの問題とかになってくるのかもしれないけれど、学生が考え、手を動かす中でそれを身につけていくサポートができるのが理想ですね。

5. 学びの位置づけ

S だから、その一、一つの模範を見せるということもたしかに一番簡単な方法ではあるんだけれども、周りのみんながこう考えてるっていうようなのをピアレビューさせるということが、おそらく一つの解を生むだろうって思います。そしてさらに教員が修正するというようなプロセスを基礎ゼミの中で5、6回は繰り返して行うだけでも、ある種まともな議論をしなければならないレベルのことはつかめるようにはなるだろうと思います。もちろん、指導するというか介入する教員の考えや指導方法にも依るとは思うけれども。

それと、もう一つ、前にもお話ししましたが、極めて *fantastic* な⁽¹⁴⁾ ことから極めて理性的、常識的、あるいは合理的なことまでを考えて、その間のどこに自分の考えや自分自身がいるのかを「設定しろ」って言ってるんです。*Fantastic* なことを考えられないと創造性は生まれてこないし、極めて常識的なこと「も」考えられないとみんな生きて行かれないよね、と。

K それができたらすごいですよね。

S そうそう、だからね、「さて、いまキミたちの言ったことはどこだ!?!」というようなことをいつも意識しながら活動させられるか、ということができるようになればいいんだけれどもなあと思っています。やっぱり、位置づけて、自分を「設定する」ことだし「区切る」ことなので、それをやってみないと、「自分って何かな」、とかいうような分析はできないわけです。「私ココにいるのよ」、っていうことがわかっていないのにこっちでの話あっちでの話なんてできませんよね。自分が *fantastic* なことを言ってるということが認識できてないのに自分では常識的なこと言ってると思ってるんだったら、それこそ意味不明⁽¹⁵⁾ になってしまいますもんね。

K それをやることで、社会で生きていく中で出くわす根拠のない *fantastic* なことに巻き込まれるリスクを回避できる面もありますもんね。そういうリテラシーも身につけていけるようになってほしいですね。たとえば何らかの *ideological* なものや、あるいはそれぞれの地域に特有のメンタリティのようなものがあるとして、それを客観視できないまま巻き込まれることがないような姿勢を身につけるといっていいのでしょうか。

6. 社会の中で生きる

S 何年か前の短大生でかなり有能な学生が数十人ほどの会社に入ったんですが、人数の少ない会社って、意外にもなんですけど、わりと、情報共有とかマニュアル化とかされてないようなんですよ。さらに、仕事の内容や手続きなんかも1年目のその卒業生なりにわりとわかっているつもりで話していても、社内の相手がわかってきていない、あるいは実際わかっていないというようなことが多いらしくて、意味わからん、って言われちゃうそうなんですよね。別の卒業生と話していた

ときも、数人からなるシヨップであるにもかかわらず、お客様との対応の過程やその結果として報告の必要な情報などが店内で情報共有されていなくて、親会社の大きなシヨップへ研修に行ったときには、その違いがよくわかったって言っていた卒業生がいました。

K わかってしまってることがつらさを生み出すということもあるわけですね。つらいですよね。ある意味その卒業生たちは優秀なわけですよ。

S そうなんですよ。たった1年足らずで、社内での自分の仕事の手続きとか書き留めたノートが2冊に及んでいるっていうような話を聞くと、逆に言えば、そういう情報って社内で共有したりマニュアル化したりしてないんだな、と端から見ているとなんとも言えない気持ちになりました。そしてね、周りの社員さんたちが効率化や簡素化、あるいは構造化を求められない人間だったり、求めたとしてもそもそもできない人たちだったりするとね、そのうちその子たちまでがそのようになっていってしまうということが大きな問題としてあげられるようになるんじゃないかと思うに至ったわけです。ある意味危険というか…。

K なるほど。

S そしてね、そういう社会に今はなりつつある、あるいはなってしまうところがある、ということかもしれない、ということですよ。

K そうですね、それはほんとに怖いですよ。

S せっかく教育して、あるいは学んで大学や短大を出て行っても、出た先の社会がそれを受け入れられるだけのチカラがなければ、出て行った学生たちは結果的に能力を発揮することなく同じ社会によくはない意味で溶け込んでしまうことになる。

K もちろん、その社会や会社とのミスマッチ

ということもあるかもしれませんね。ただ、そのうち、疲れてきてしまって、自分の能力を発揮しないほうが楽だ、というようになっていってしまうということが繰り返されていくというのはもったいないことです。

S そうなりたくないから、というのもあって、どうしても言いたいときには言ってしまう自分というのが出てきてしまうというのも事実でしょうね。

K そうですね、そうしないと、悪い意味で楽なほうを選んで生きていくようになりかねないですよ。

S ローカルにはよくわかる論理というか、そこでは合理的ではあるんだけど、でもね、引いて見てみるとね、怖い話だよ、という。

K フィールドワークをしていると、現地の社会にぎりぎりのところまで巻き込まれながらも、どこかで冷めた目でつきはなして見ている、という態度が重要になってきます。巻き込まれてしまうのはかえって楽なんですよ。スタートレック⁽¹⁶⁾にボークという機械生命体が出てくるんですが、彼らは個ではなく集団でつねに行動して周りを取り込み捕食しながら生きている。抵抗は無駄であって、取り込まれたほうが楽だよっていう。これは、われわれの社会でも、場所を問わず常に起こりうることだと思います。自分が取り込まれつつある社会を、一歩立ち止まって見つめられるように鍛えておく。

S うん、だから、よく言うのは、ペルソナ⁽¹⁷⁾というか、要するに自分自身とその影であるところのものを使い分けていくという演じわけというか、そういうのは必要なと。だから、もう、いまは、無心になる、というのも一つの防衛機制⁽¹⁸⁾として働いている人もいるかもしれないですよ。例えば、電話を一つ取るのにも、誰への仕事なのか誰からの仕事なのかと考えるよりも、無心に対応することで感情的なエネルギーを使わなくて

すむようになる、という方略になるということがある。必要なときだけ感情は活性化させるというようなね。さっきお話しした卒業生も最近そうなりつつあるというようなことを言っていましたし...

K そういったことで人間は長い時間をかけていろいろと侵食されて、そのうち自分の中でなにか納得したところに落とし込んだときに、一人の立派なおトナになる。

S そうですねえ、カギ括弧付きの「立派なおトナ」にね!! (笑)

K おそろしい(笑)!! 毎年お正月に高校の同窓会をやるんですけど、30半ばにもなると、就職した業界によって、考え方や話し方の違いが明らかに出てくる。やっぱり、高校のときの性格からは変化しますね。変わらないあって言いはしますが、やっぱり変わる。

S 変わらないとその業界や組織でやって行かれないんですよ。

K 大学院で研究をしてから、官僚になって、また民間で働いている友人がいるんですが、それぞれの仕事で必要とされる人格って結構異なると思うんです。人格って20代前半でほぼ固まるイメージがありますが、わりとその後の可塑性みたいなものもあるんだと思います。仕事の環境や様々な要因によって、良い方向にも悪い方向にも変わりうると感じます。

S あともう一つの問題として、自分の能力というかスペックを超えず一っと仕事をし続けなければならない人と、自分のスペックに見合った形で仕事をこなしていける人とで、その変容の仕方というのはずいぶん隔たりが出てくるんだろうなと思います。

K そうですね、よく「二番目に好きなことを仕事にするといい」という言い回しを聞きますが、確かに一理はある。思い入れや高い志を持つことはシェウカツでは重要な態度ではあるけれど、働いてからの現実とのギャップ

をうまく乗り越えていく覚悟も必要だと思いますね。

7. 常識と創造性のはざままで

S ボク自身は、この職業になりたいと思っていたわけではないんだけど、結果的に大学には関わってきたいな、という大きな理由は、自分がどうであるとか、自分がどんな人間であるかということがわかってなかったからというものもあると思うけれど、そのほかに言えば、自分を組織の中に完全に入れてしまうというようなことはいろんな意味でムリだろうなあ、と漠然と考えていたこともあり、また、その中で自分をどのようにでも曲げて適応するというのも難しいだろうなあと感じていたからかもしれない。そういうのが頭の隅っこのほうにはあったりして、当時の先生たちや大学院の先輩たちを下から見ていると、この業界なら少しはそのへんマシなのかなあ、というふうに思っていたのはありますね。だから、お話を聞いていて、明示的あるいは意識的ではないにせよ、どこか無意識的であって、というのが、感じたことですね。その点では、結果的にここにいる、ということになりますかね。ただ、まあ、これ、ほんとは大学っていうところが一番「そういうところ」かもしれない、っていうのはありますけどね(笑)。

K まあメタ的に見過ぎても疲れてはくるのですが、ただ、前もどこかでお話したと思いますが、青臭い言い方をすれば、やっぱり研究者って自分なりに「自由」になるためにこの世界を志したってのはあると思うのです。前にお話に出てきた「頑固」⁽¹⁹⁾というもの、大学教員というのは、言うたらめっちゃめっちゃ「頑固な」種類の人間だと思うんです。ただ、一回どっかで開いた後、あえてもう一度頑固になってみる。

S あるいはならないと自分につくれない、と

かね。

K そういうことを繰り返して、われわれはここまでできているのかもしれませんがね。

S 学生たちの中にはほんとに「頑固」だなと感じさせてくれる場面によく出くわします。例えば、就職は事務職にしか就かないと宣言してシュウカツしていたり、自分の生活スタイルは絶対に変えなかったり、結婚なんて絶対しないって宣言したり、要するに、自分の今もってる価値観は絶対に変えない、という学生たちがとても多いと思います。また、授業中などでも、様々なやり方を提示しても頑なに自分のやり方を踏襲しようとしたり、他に事例を挙げても自分とはまるで関係がないかのように応答したり、決めつけというか自分の価値の範囲でだけで判断するというか、そのような傾向があるように感じますね。

K それでずっといけばいいんですけどね…。

S もちろん、一足飛びに生活が変わるような可能性を求める学生たちもいますよ。一流企業を目指して実際に入っちゃう学生とか、非常に狭い門と言われるような職を目指そうと特定のゼミに入ってキャリアの勉強をして実際に受かった学生とか、中にはもちろんそういった学生たちもいます。ただ、まあ、そんな学生たちでも、きっと大きな壁にぶち当たることはあるでしょうし、取り返しのつかないくらいの大きな失敗をしてしまうことだってあるでしょう。

K もし壁にぶち当たったときに大学や短大でのことは思い出してみしてほしい。自分の価値や見方が崩壊したからといって自分が終わりだということには思わないでほしい、とは言いたい。—中略—

S どうしても教員の立場から、このぐらいのスパンでこのぐらいの教育をと思うわけですが、実際にはそうならないと、こっちも反省するし、学生たちにも何とか言ってほしいと

おもっちゃうんですね。でも実際には…。

K どうにもならないこともありますし。本当は、卒業して数年経った頃が勝負かなというふうにも思うんですよ。

S 今の時代とくにそれは後ろに伸びてますからね。

K 僕は、30を超えたくらいにやっと、大学るとき聞いたことが、ああこういうことか、というふうにはリアリティを持ち始めたところがありました。初めて非常勤で講義をしたのが30歳のときでした。その頃からでしょうか、メ切りをまもるとか不義理をしないとかがそういうごくあたりまえのこと、あいさつとか「筋を通す」とか、そういうことが「社会的な」人間関係には本当に重要だということが身に沁みてわかってきた。我ながら遅すぎますが(苦笑)。研究や教育については、たとえば「社会」や「文化」について、教科書の受け売りではなく多少は自分のことばで語れるようになったことかな。専門用語をある程度自分でかみくだいて、自信を持って人に説明できるようになったという実感がありました。

S ま、一握りの人はそうかもしれないけれど、典型的には、ぐちゃぐちゃぐちゃっとなってる中で、さっきの括弧付きの「立派なおトナ」になるということをめざしている、というわけですよ。そういうプロセスのなかにわれわれの担当する教養科目のようなのがあって、それらを受講していてくれたら、ひょっとすると、括弧付きの「立派なおトナ」じゃない立派なおトナになってくれるのではないかという話になりますよね!

K そういう期待がありますよね! 仮に、その括弧付きの「立派なおトナ」になってしまっていたとしても、すこしでもどこかおかしいなと思ってくれるようなことがあれば、括弧が少しでもとれた立派なおトナになっているかもしれないわけですよ。もちろん、そん

なことをえらそうに論評できるほどわれわれだあって立派なおトナでもないんですが(笑)。

S そう、ないから(笑)。

K まあ、えらそうに…。

S そう、推測でしかないから…。

K 論評していいものかどうかもわからないんですが…(笑)。

S 示唆すらできない…(笑)。まあ、要するに、常識的なことと創造的なこととのほごまで教育の場面にいるわけで、それが言ってみれば、多様であるということ、多角的であるということの裏返しでもある、ととらえることもできますね。

8. まとめと展望

いつの頃から我々おトナは「お世話になっております」なんて言うようになったのだろうか。おそらく、「立派なおトナ」として社会の中でうまくやっていくために知らない間に身につけた形式的なやり方である。自分なりの理性を働かせ、自分がおかれた場において合理的であろうとして、身の回りに準じていこうとして、いつの間にか覚えてしまったやり方である。研究者なら、大学院の研究室という小さな社会から始まり、分野によっては様々な地域・社会と直接関わる分野もある。また、指導教員や共同研究者との研究の打ち合わせ、投稿論文の査読者とのやり取り、科研費等研究費の申請書作成など、専門分野の共通語彙、あるいはだれにでもわかることばを用いて、丁寧にわかりやすく相手に伝えるための術を磨く。大学の教員は、大学卒業後すぐに研究者としてキャリアを積んできた場合、企業の新人研修のような

いわゆる社会的に適合するための教育は受けたことがないし、ビジネスマナー講座のようなものを受けないことが多い。しかし、いつのまにか、「経年変化」⁽²⁰⁾とともに身につけてきた様々な「生き方」というものがそれぞれにある。「立派なおトナ」になろうとせずに生きていきたいと思っている一方で、やはりそれも一つの生き方として受容している部分もある。

学生たちには、多面的な価値、視点、考え方を通して、自分を見つけていけるようになってほしいと切に願う。教員として、どのような学びの手がかりを与えられるか、その手助けがどのくらいできるか、そしてなにより、学生たちとの間での会話をすることによって様々な教育場面の材料にたくさん出会えることに感謝しながら、我々教員の常識の維持と創造性の発揚を今後の教養教育のなかで位置づけて行くことができればと思いながら、この対談を締めくくりにする。

本対談を文面に起こすにあたり、筆者らが担当してきた金沢星稜大学ならびに金沢星稜大学女子短期大学の学生たちからは、教員として学ぶための多くの材料を受け取ってきました。ここに記して心からの謝意を表します。また、長い時間、教育に関する議論にお付き合いいただいた多くの先生方にも感謝の意を表します。

なお、今後も本紀要では、教養教育をはじめとして、一般的な大学における高等教育について考えることのできるような企画を継続していく予定です。多様な価値と創造性をお持ちの読者との対談を心よりお待ちしております。

注

- (1) 2015年度までの「情報科学」を改称して2016年度から担当する科目
- (2) 人類学のこと。筆者の専門分野は、小西が文化人類学、宗教人類学、佐々木が心理学、情報学である。
- (3) 異文化に関するレポートでは、旅先で見聞きしたことを題材にしてもよいとしているが、ともすると「～へ行って～を見ました。異文化体験ができてよかったです」というような、考察を欠いたあたかも「絵日記」のようなものが出てしまうという意味である。

- (4) 学生たちの中には、自分自身がこれまで経験してきた生活や価値観や自分に対する見方などについて、教員が授業や個別の指導で様々な視点から揺さぶりをかけて考えさせたり感じさせたりしようとしても、「頑固に」変えようとしない者が少なからず存在するという事実には筆者らは気づき始めている。
- (5) 伝統的にいわゆる「講義」と言われているような、教員が一方的に話し続けるだけの授業ではなく、学生が様々な形の活動をできる機会が少しでも多く取れるような授業を目指しており、その点で積極的な意味として用いている。
- (6) 本対談は佐々木の研究室で行ったものである。
- (7) 教員自身が授業の中ですべてのことをいつも完全にわかって話しているということはありませんので、場面やトピックによっては、自分たちの中がかみ砕けていない状態で授業を進めてしまう、もしくは流してしまうということもないわけではない。
- (8) 少し以前の対談で、2年次基礎ゼミの最後のほうで、あるゼミ生が書いていた話を持ち出したことがあった。彼女は次のように基礎ゼミを締めくくっていた。「どんなショボイ課題でも考えて意味づけが出来たら、自分なりの何かを得られるんだと思います。逆に言えば、自分なりに何を得られるかを考えなかったら、何をしてもただその技術を身につけるだけで終わってしまいます。一中略サークルはどうしたら良くなるだろうか、人間関係とか私自身のこととか。でも、なんだか考えて解決策が見つかったら終わり!って感じです。いや、普通のことなんですけどそういうことに対しても、で、結局何が得られたんだろうってところまで考えないと、どういう意味があったんだろうってところまで考えないと、自分の力につながっていかないと思います。」
- (9) ゼミや少人数の科目では、授業の最後にA4用紙を配布して、授業のふりかえりやまとめ、授業の感想や担当者への相談事などを毎回書かせて2、3日後に提出させ、添削した後に返却し、評価に使うと共に学生とのコミュニケーションツールとして利用している。
- (10) 2015年度の経済学科1年次
- (11) 2015年度教養教育部FD活動の一環として、教員による相互授業参観を実施した中で、筆者らも互いの授業を参観し合った。参観後にはコメントシートを記入し、授業方法や内容について充実した議論を行うことができた。佐々木は小西の「宗教学」、小西は佐々木の「情報リテラシー」を参観している。
- (12) この対談の前段において、モノヤコトに名前を付けることの意味や作用について以前に議論していたことに言及したのを受けている。
- (13) 2015年度の経営学科2年次
- (14) 常識的、一般的な考えや発想、あるいは理性的なやり方などからずっと離れたところにある、より感情的、感性的、あるいは芸術的な見方や感じ方などを総称している。
- (15) この言葉は、筆者らの本対談の前段で出てきた会話の中に登場した、「意味不明」と連発する先輩社員に困り果てているある卒業生についての話から引用している。
- (16) アメリカのSFテレビドラマシリーズ。宇宙の多様な生命体の関係を軸に展開するストーリーは、人類学的な視点からみても大変興味深い。
- (17) スイスの精神科医・心理学者ユングの用語
- (18) オーストリアの精神分析学者・精神科医フロイトの用語
- (19) 注(4)参照
- (20) この言葉は、いわゆる消極的、否定的な意味での一般的な言葉としてではなく、筆者の一人である佐々木が教員になってから頻繁に使ってきた積極的な意味でのことばである。人間誰も年齢を経るだけで精神的な様々な成長や学びや育みが必ずあることを示す言葉として用いている。

